軽種馬生産技術総合研修センター マンスリーレポート 57

軽種馬生産技術総合研修センター
Center for Equine Breeding Technology

“アシと蹄を考える会” 第7弾！ パートⅠ
ー平成25年度第2回リム＆フットケア・ワークショップー

平成26年2月6日に開催されたワークショップについて、その内容を簡単に紹介します。今回は前半部分の話題です。

症例報告

1.「休養馬（7歳）の縦裂」
（北海道日高装蹄師会　赤石孝一郎:認定装蹄師）

症例は中央競馬所属の7歳馬で、蹄尖部中央の蹄冠から蹄負面までの縦裂治療のために休養中でした。蹄尖部の凹湾が重度で、long toe underrun heelでした。裂蹄の上1/3から上の部分には、裂部を止めようとした焼きゴテの跡が4箇所確認できました。蹄冠部からの裂蹄ではなく、反回時や後踏肢勢による蹄尖壁へのストレスで凹湾が顕著となり、その部から裂蹄が発症したと推察されます。

初回装蹄療法では、凹湾した蹄尖壁を改善するために、蹄尖部に多めの端蹄廻しを施し、蹄鉄の鉄頭部に下狭を大きく設けてセットバックして装着し、反回ポイントを下げました。蹄鉄には側鉄唇を設けて裂部の広がりを抑えるとともに負重圧を蹄全体に分散して蹄底の沈下を抑制するため、蹄下面にはエクイパックを充填しました。また、裂部を刮削したところ、蹄冠部付近から出血を認め、歩行時、裂部にズレが生じ、支跛を呈しました。1ヵ月後、裂部のズレや歪みを抑制するため、3×6cmのステンレスプレート板を用い四隅をビス止めし、裂部を固定しました。3.5ヵ月後から3回に亘り蹄の生長促進のため、ブリスターを蹄冠部に塗布しました。5ヵ月後には、蹄壁の凹湾はほぼ改善され、9ヵ月後には、裂部が蹄の生長により改善されましたが、その後、調教中に骨折を発症し、競走復帰は叶いませんでした。最後に演者は、今回の装蹄療法の要点について模式図を使って次のようにとりまとめました。「蹄壁の凹湾している部分を安易に鑢削してしまうと蹄壁の硬い部分を削除することから、蹄壁自体の強度が低下するので、安易な鑢削は避けるべきです」。

【筆者コメント】

演者は、このような発表は初めてであり、緊張して原稿を棒読みしている感じで、少々分かり辛い部分も見受けられたが、報告内容としては、重度の裂蹄への処置として示唆に富んだものであり、各種裂蹄にも応用できるものと期待したいところです。

2.「繁殖牝馬（7歳）の裂蹄・蟻洞」
（北海道日高装蹄師会　大池武則:認定装蹄師）

患馬は繁殖牝馬で、ボディコンディションスコアは高く、繁殖として牧場に上がってきた時から裂蹄はあったとのことで、両前の蹄壁全体の凹湾、蟻洞、蹄底は平らで、左前の蹄尖部中央の裂蹄は、蹄冠から蹄負面まで至る重度なものでした。前演者の「休養馬（7歳）の縦裂」と症状が類似しており、ほぼ同様の装蹄療法として、蹄尖部の端蹄廻しや側鉄唇を設けて反回ポイントを大幅に下げ、蹄底にはエクイパックを充填し、裂部にはステンレスプレートをビスで4箇所固定を試みました。それらの処置で、反回ポイントを大幅に下げたにも拘らず、1ヵ月と4ヵ月後には、凹湾の影響と思われる裂部上端からの排膿が認められ、なかなか裂部が下がってきませんでしたが、6ヵ月を経過したころから蹄壁の凹湾は徐々に改善されてきました。およそ9ヵ月後には、両前蹄の蹄壁の凹湾は改善されましたが、左前の裂蹄は未だに残存しているとのことです。あまり経過が良くなかった理由としては、支跛を呈した時期や排膿した時期が不明であったり、あるいは裂部を固定していたビスが外れていたりしても放置されたなど、日常的に患馬を看護する牧場のスタッフ側の対応にも多少問題があったのも事実です。

【筆者コメント】

前演題と同様に、原稿を棒読みする場面が多く、ポインターで指し示しながらのスライド説明もなく、全体的に分かり辛い場面も見受けられ、最後に用意していた専門書から抜粋した「裂蹄止めいろいろ」と題したスライドも説明が無いままに終了してしまいました。演者は大分緊張していた様子でしたが、講演の要点は適切だったので、このような報告講演を数多くこなせば、今後の活躍に期待が出来ると感じました。

赤石孝一郎氏の説明スライドの1枚

大池武則氏の説明スライドの1枚